



TITLE:

生物学至上主義への道 一ひとつ の歴史観のたそがれ一

AUTHOR(S):

佐々木, 博光

CITATION:

佐々木, 博光. 生物学至上主義への道 一ひとつの歴史観のたそがれ一.
人文學報 1996, 77: 1-26

ISSUE DATE:

1996-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/48467>

RIGHT:

生物学至上主義への道

—ひとつの歴史観のたそがれ—

佐々木 博 光

- I 生物学至上主義の時代
- II ひとつの歴史観
- III 有機主義から生物学至上主義へ — 独文学と民俗学 —
- IV マックス・ヴェーバー — 文化科学の生物学化にたいする警告 —
- V ヴェーバーの遺産

I 生物学至上主義の時代

「国民社会主義とは、政治に応用された生物学である。」“NS ist politisch angewandte Biologie” これはナチス教員同盟の指導者であったハンス・シェムの言葉であり、のちに第三帝国のなかでさまざまな立場の人たちによって好んで引用されることになったフレーズでもある¹⁾。また、生物学者カール・ツィンマーマン編集の1933年に出版された叢書『第三帝国 新しい国家と民族の礎石』は、その第一章「生物学と国民社会主義」で、「国民社会主義が生物学によって基礎づけられ、生物学にしたがって思考する世界観 eine biologisch begründete und biologisch denkende Weltanschauung である」ことを証明しようとしていた²⁾。

まさに、生物学は時代の学問となった観があった。第三帝国の学術・教育世界に占めた生物学の比重の異常とも言うべき突出については多言を要すまい³⁾。学術・教育世界に見られた生物学にたいする期待のたかまりを、いま生物学至上主義 Biologismus という用語で呼ぶことにしたい。ただし、ここでの問題関心は生物学の生成・発展そのものの歴史にあるのではない。ほんらいそれとは別個の専門分野をなす人文・社会科学においても生物学にたいする期待のたかまりが確認できる。この背景になにがあるのかを考察するのがここでの課題である。そもそも人文主義的な教養が珍重されていた国で、なにゆえかくも極端なパラダイムの転換が起こりえたのであろうか。それは遺伝的資質にもとづく民族共同体理念を正面に掲げる独裁政権の誕生という理由にのみ解消することのできる問題なのであろうか。第三帝国下の諸科学の動向を

扱った近年の諸研究は、ナチスによって学術世界が「画一化」 Gleichschaltung されたというテーゼを疑問視する傾向にある⁴⁾。もしそうだとすれば、なおさらなにかゆえなくも極端なパラダイム転換が起りえたのが疑問となろう。人文主義的教養のなかでも、歴史主義 Historismus なる専門用語の存在が示すごとく、歴史学の認識方法がとりわけ中心的な地位を占めていた。その本質は、レオポルト・フォン・ランケの言葉を借りるならば、「それがほんらいどうあったか」を再現することであった。いっぽう、生物学至上主義にあえて認識論上の特徴を認めようとするならば、それは先験的・遺伝的な素質からすべてを説明しようとする点にある。このまったく相反する方向にあるふたつの認識手法——帰納的思考と演繹的思考——は、いったいいかなる接点を有していたのであろうか。歴史主義の過剰がそれにたいする倦怠を生み、対照的とも言える認識方法への移行を可能にしたのであろうか。それとも、歴史主義と呼ばれる認識方法にははじめから生物学至上主義に通ずる要素が内包されていたのであろうか。

人文科学のよりよい認識方法を模索するのはほんらいそれに携わるものの責務である。そのさい、人文科学の限界と可能性を考えるうえで、過去の過ちの歴史を避けて通るわけにはいかない。もしも人文科学になにかの可能性があるとするならば、問題を対象化することによってその所在を突き止めること以外にはありえない。しかし、この可能性を正当に行使しえないときは、一転して可能性は危険性へと姿を変える。問題の対象化を放棄することは、容易に問題をタブー視することに通じかねないからである。むしろ、あきらかな過ちの歴史にこそ、批判的な思索のための素材が提供されていると考えるべきであろう。人文・社会科学の分野でも、このところ学問史 Wissenschaftsgeschichte にたいする関心がたかまりつつあり、そのなかには過去の清算 Vergangenheitsbewältigung と呼ばれる部門も含まれている。しかし、人文科学にかんしては、人文科学と生物学至上主義の関係を正面から考察したものはまだ見当たらず、ただ人文科学のなかの生物学至上主義の痕跡を事実確認として提供している研究が散見するのみである。

第三帝国下の歴史学科の動向を扱ったカール・フェルディナント・ヴェルナーは、歴史叙述の検討を通じて、ドイツの歴史学がナチスによって「画一化」されたという幻想を払拭した。ヴェルナーによれば、そもそもドイツの歴史学はすでにナチスの台頭以前から画一的であり、ナチスは自らの歴史観を構成するさいにそれを継承したにすぎず、そこには独創的なものはまったく見られないという。この文脈のなかで、かつての歴史叙述を特徴づけた種族的・帝国主義的な構成要素が、すでに第一次大戦以前に自然科学的・生物学的な要素に転化していたことが指摘される。ヴェルナーの著作は第三帝国期の学科史 Disziplingeschichte の先駆的な業績としていまなお高い評価を受けているのではあるが、歴史学科のなかで生物学の認識方法が支配的な地位を獲得したようには思えない。むしろほとんどの歴史家が自らの伝統的な研究方法に固執しつつあった。詳細は稿を改めなければならないのであるが、生物学至上主義の時代にあっ

て、自らの伝統に固執しつづける歴史学科はゲッターと呼ぶべき地位に追いやられていたという印象を拭えない。ただし、ゲッターとは言っても、そこで展開されたのは「抵抗ではなく、耐乏」Nicht Resistance, aber Resistenzであったというヴェルナーの指摘を付けくわえておく必要がある⁵⁾。

第三帝国下の歴史学科にかんする研究からもうひとつ紹介しておきたい。やはり第三帝国期の歴史叙述を調査したカレン・シェーンヴェルダーは、30年代の後半に歴史叙述の関心の焦点が国家 Staat から民族 Volk に移ったと主張する。そのさい、民族概念は有機的な結合体と理解されており、ここで問題としているような生物学的なニュアンスを多分に含むものであった⁶⁾。たしかに、第三帝国期にはそれまでの国家に焦点を当てる政治史にたいする批判から、民族の歴史 Volksgeschichte を下から構築しようとする歴史家の活動がこれまでになく活発化した⁷⁾。そして、かれらの民族理解にはすくなく有機的・生物学的な要素が見られることも確かである。しかし、かれらの「新しい歴史学」も歴史学科内部でけって指導的な地位を握ることはなかった⁸⁾。全体として見たならば、ナチスをもってしてもドイツの伝統史学を粉砕することはできなかったというのが真相であろう。

ゲルマニスティークの名称で知られる独文科は、1966年に開かれたミュンヘンの独文学者会議で「独文学研究と文学作品のなかのナショナリズム」というテーマを取りあげた。戦後の独文学研究の転換点、さらに学科史研究の先駆的業績と評されることもあるこの会議で、「独文学研究と第三帝国」の関係についてカール・オットー・コンラディが情報を提供してくれている。コンラディは独文学者連盟 Germanistenverband を指導した独文学者や民俗学者、さらに20年代の教育改革運動であるドイツ学運動 Deutschkunde-Bewegung を主唱した教育学者・ドイツ語教員の見解を引用するかたちで、20・30年代の独文学の世界に有機的・生物学的な思考がひろく一般的に認められたことを指摘する⁹⁾。20・30年代の人文科学のなかで有機主義・生物学至上主義の影響をもっとも強く受けたのが独文学・民俗学であったという見方には同意できる。しかし、コンラディの研究は事実確認の域を越えてはおらず、なにが生物学至上主義を招く原因になったのかという問題にまでは進んでいない。30年代の前史を20年代のみに限定せず、もっとながいタイムスパンをとり、学科に特徴的に見られる一定の思考パターンを抽出するような分析が必要なのではなかろうか。

学科史に関心が集まるようになったのは、60・70年代の先駆的な業績を除くならば、ここ数年のできごとである。学問の限界と効用を考えるためにこれはほんらい歓迎すべき現象であるはずなのだが、手放しで喜んでいるわけにもいかない。とりわけ第三帝国期にかんする学科史研究に顕著に見られる傾向なのであるが、犯人捜しに終始しているものがすくなくない。つまり、だれが確信犯で、だれが体制順応型であったかといったスタイルの問題設定が後を絶たないのである。この分野でも「それがほんらいどうあったのか」という歴史主義的な設問が幅を

きかせていると言ってよかろう。しかし、このような研究姿勢が実りある成果をもたらすとは思えない。われわれは過去を審判する裁判官なのではない。われわれが学科史と取りくむのは、われわれが同じ過ちに陥るのを未然に防ぐためなのである。歴史をくり返さない可能性があるとするならば、それは問題の核心が対象化された場合だけである。過去の過ちを自分とは無縁なものとして審判するような態度は、厳しく慎まねばなるまい。

歴史叙述は、好むと好まざるとにかかわらず、意味創出という機能を負わされている。いかなる歴史叙述といえども、この機能を免れるわけにはいくまい。ここに歴史研究の危険性と同時に可能性も同居していると言っても過言ではない。そのさい、この可能性を開きうるのは、意味創出という機能を自覚したうえで研究がルールにのっとって進められる場合以外にはありえない。しかし、大多数の研究者が、この意味創出という機能に無頓着なまま研究に埋没しているというのが実情なのではなかろうか。筆者の見るところでは、第三帝国の学術世界にも確信犯と呼べるような熱烈なシンパはすくなく、むしろ大多数がこの意味創出という機能に無頓着であったがゆえに、時代精神にのみ込まれてしまったというのが実際のところではなかったかと思われる。この観点からも第三帝国の学術活動にかんする研究は、いぜんとしてわれわれと無縁な対象ではありえない。

さて、せまい学科という枠を越え、社会科学の世界の全般的な生物学にたいする期待のたかまりを考察している研究もある。歴史家デートレフ・ポイカートによれば、「1900年前後に、人間諸科学のテクノクラシー的・生物学至上主義的パラダイム転換が行われ、そのなかで「学者の慢心」も一気にたかまった」とされる。そのさい、「人間諸科学」として念頭に置かれるのは、社会学、心理学、教育学、社会医学、社会衛生学等の社会科学である。そして、かれはパラダイム転換の原因についても、マックス・ヴェーバーの言説をニーチェとの関連から読み解くというかたちで議論を展開している。

19世紀に神が死んだあと、神に代って、科学が生への支配者となった。だが、科学の与える救済約束は、個々人に即するかぎり、死という限界経験によってことごとく否認されてしまう。そこで科学は永遠に生きつづける純潔人種の民族共同体というフィクションを考え出し、そこに救いを見いだしたのである。そして本物の生命、本物であるがゆえに当然死すべき生命を犠牲に供したのである。かくして「最終的解決」の脚本家たちは、とうとう死の支配者となった¹⁰⁾。

神という永遠の存在を喪失した世界は、連続性を保証するものとして血の神話にその代用品を見いだしたというポイカートの議論は興味つきないものを含んではいるが、なにゆえ代用品が血の神話でなければならなかったのかにかんする説得的な議論はない。このような疑問が生

じるのは、ポイカートが世紀転換期以降という比較的短い期間を考察の対象に選び、どちらかというと当時まだ歴史の浅かった学問のみを扱っているからであろう。生物学至上主義はたしかに学術世界のひとつのパラダイム転換にはちがいないが、それはけっして突如として現れたというわけではない。前史の評価をも含むもうすこし長いタイムスパンをとった考察が必要となろう。

以上のように、人文科学と社会科学で、人文科学のなかでも歴史学と独文学で、生物学至上主義にたいする対応に微妙な相違があることがわかる。すでに言及したように、社会科学は比較的新しい部類の学問に属する。このため、生物学至上主義というパラダイム転換の原因を考察するために、一定の思考パターンを抽出するといった作業にはあまり適しているとは言えない。ここで独文学およびのちにそこから自立する民俗学を主として考察の対象に選ぶのは、これらの学問分野がそれなりに伝統を備えており、長いタイムスパンにもとづく考察を可能にしてくれるからである。考察は以下の手順で進められる。まず、生物学至上主義の影響をあきらかに受けていると思われる研究を取りあげ、そこに一般的に認められる思考パターンの特質を把握する。そこから、生物学にたいする期待を表明する議論の前提に、共通するひとつの歴史観が横たわっていることがあきらかにされるであろう（Ⅱ）。つぎに、19世紀以降の独文学・民俗学の発展を振り返ることにより、生物学至上主義のなかに確認された歴史観が、ドイツの人文科学の伝統のなかにしっかりと根をもつものであり、それが生物学至上主義に通じうる要素をはじめから内包していたこと、さらにこのパラダイム転換がいかなる契機で行われたかがあきらかにされるであろう（Ⅲ）。帝政期以降しだいに生物学化の速度を早める人文・社会科学に警告を発しつつけたものもある。社会学者マックス・ヴェーバーは、すでにかれの活動のはやい時期から文化科学の生物学化にたいするはげしい批判を展開していた。ヴェーバーの言説を辿ることで、当時の人文・社会科学の世界における生物学にたいする期待のたかまりをあらためて確認するとともに、それに挑むための戦略をも検討する（Ⅳ）。ヴェーバーがこの分野でのこした遺産は、20—40年代のドイツの学術世界のなかではどこにも場所を見いだすことがなかった。最後に、この事実がかれもその一員であった社会学会の動向に即して確認されよう（Ⅴ）。

Ⅱ ひとつの歴史観

ここでは、生物学至上主義の影響が濃厚な人文・社会科学の特色を把握するために、教育学者エルンスト・クリーク、独文学者オットー・ヘフラーの議論を取りあげることとする。この二名を選ぶにあたっては筆者の主観的判断が多分に作用していることを認めなければならないが、かれらの議論はかならずや第三帝国下の学術の一端を垣間見せてくれるはずである。

クリークはヴァルター・フランク監督下の「新生ドイツの歴史のための帝国研究所」Reichsinstitut für die Geschichte des neuen Deutschlands の第四回年次大会で講演を行った。この講演はのちに「ドイツの歴史像のなかのゲルマン的性向」というタイトルで『歴史学雑誌』に掲載されている¹¹⁾。クリークの論法はつぎのとおりである。かれはシニョーリ・ストゥルッソンの『ヘイムスクリングラ』から英雄精神、従士の誠実といった要素を導きだし、それを古ゲルマンの美德として称える。しかし、中世の聖職者アダム・フォン・ブレーメンの歴史叙述にはこの美德がまったく認められないことを嘆く。「外来の要素が積み重なったためにゲルマン的性格に断絶・亀裂が持ち込まれ、それが歴史理解にも反映されている」と解釈する。ここには、歴史の流れを喪失の相のもとで眺める視点が貫かれている。しかし、ゲルマン的性向は死に絶えてしまったわけではないという。

教会的・古代的な外来の要素の堆積のもとでもドイツ民族のなかのゲルマン的な生の本質は数世紀にわたって作用しつづけた。そして、生きた血 das lebendige Blut がくり返し堆積物である教養という層に刺激を送りつづけた。

ここには、教養と生の乖離が強く意識されていることがわかる。そして、この文脈のなかで、西欧から押し寄せる機械主義に対抗すべくドイツ人が18世紀に生物学を編み出したことがかれらの最大の功績のひとつとされる。クリークにとって、教養という堆積物の下からゲルマンの生の本質を汲み取ることが歴史学の任務となる。しかし、かれの目から見れば、当時の歴史学はとうていこの任務を果たす状況にはなかった。

客観主義 Objektivismus・中立主義 Neutralismus といった曖昧な学問論は、無用のフィクションとして新しい認識の光のなかで雲散霧消した。

クリークは「客観主義」を別の箇所では「機械論的な実証主義」der mechanistische Positivismus とも呼んでいる。ここには、学問史上に占める第三帝国の位相が鮮明に現れている。一口に言うならば、それは有機主義・生物学至上主義による客観主義・実証主義にたいする「画一化」の試みであった。このような攻勢にあっても、全体として見るならば歴史学科は自らの伝統に固執しつづけたと言ってよからう。

オットー・ヘフラーは、1937年7月6日にエアフルトで開催されたドイツ歴史家会議で講演を行った。この講演もののちに「ゲルマン的連続問題」というタイトルで『歴史学雑誌』に掲載されている¹²⁾。ここでまず、ヘフラーはアルフォンソ・ドプシュ流の連続説を否定する。それによれば、ゲルマン人は古代の文化遺産の破壊者ではなく、それを継承・発展させる能力を十

分に備えていたとされる。したがって、ここで問題になっている連続とは、担い手が代っても文化遺産が存続するかどうかという意味での連続である。しかし、ヘフラーの問題にする連続はそれとは異なる。かれにあっては、「種族の生存形態の発展のなかに有機的な *organisch* 自律性の兆候が現れる場合にのみ」連続性が問題になる。「有機的な観点から」、連続性が問題になりうるのは「種族の本質、その遺産が間断なく存続する場合のみである」という。では、なにゆえ歴史学は種族の生存形態に断絶を見ようとするのか。ヘフラーはその責任を実証主義に帰す。

実証主義はその固有の方法に則って種族の生のみならず個人の生のなかにもたえず断絶を見ようとする。したがって、それはたえず生の統一体を部分に「解体する」であろう。

ここにも、すでに触れた当時の学術世界の時代精神、すなわち有機主義による実証主義の「画一化」という局面が姿を現す。つぎに、ヘフラーはかれのテーゼ、すなわちゲルマン的連続を立証するために、ローマ起源と考えられていた帝国権標の起源を、かれが古ゲルマンと考える世界に遡る。結果的にかれは、かれが古ゲルマン神話と見なす北欧神オーディンの標章を介して約3000年前、つまり青銅器時代の北欧の洞窟壁画に辿りつく。

そこにわれわれは聖なる武器の描写を見る。それはゲルマン的連続がすくなくともトロイア戦争の時代まで遡りうることを示している。

しばしば、「ゲルマン的連続説」の名で呼ばれるヘフラーの主張の真偽を確定することがここでの目的ではない。ここでの課題はこのような歴史理解がいかなる意味を創出するのかを考えることにある。ヘフラーの議論は、かれがゲルマン的な要素と考えるものをローマ起源のものを取り違えてきた歴史学にたいする批判へと進む。ヘフラーによれば、ゲルマン的な生の本質に変化が起ったわけではない。それを理解するものの意識が変わったということになる。ここでも、学問と生の乖離が強く意識されているのである。

とうに忘れ去られ、埋もれてしまった生成の関連をあらたに意識させることが肝要である。有機的な発展の糸は、われわれの歴史学の大家が描くのと違った方向にのびている。南から来た歴史叙述がゲルマンの太古に遡る糸を切断し、それをあらたにかれらの伝統の世界、つまり南へと結びつけたのである。

さらにヘフラーは、「歴史学が生を破壊するのではなく、生に奉仕する」とすれば、この

「有機的な発展の糸」を手繰る以外にはないという。かれは歴史学に「政治的なものの民俗学」Volkskunde des Politischenを勧めるのである。

クリークとヘフラーの議論だけではなく、生物学への期待を表明する人文・社会科学に一樣に共通して認められるのは、歴史の流れを解体ないし喪失の相のもとで眺めているということである。そして、その原因は民族の生の領域からの学問の乖離に求められている。しかし、生の領域は完全に枯渇してしまったわけではなく、クリークにあってはそれは無意識のうちにたえず知の領域に刺激を送りつづけるとされ、ヘフラーにあってはそれ自身にはまったく変化はないとされる。もうひとつの特徴はかれらの議論に見られる再生への期待である。それは学問を民族の生に従属させることによって得られると理解されている。その手段は、クリークにあっては外来文化の影響のなかからゲルマン的な生の痕跡を汲み取ることであり、ヘフラーにあってはその連続性を証明すること、さらにその起源を外来の影響を受ける以前のできるだけ遠い時代まで遡ることであった。そして、かれらにとってかれらの現在学問を民族の生に従属させる最高の舞台と理解されていたのである。

Ⅲ 有機主義から生物学至上主義へ — 独文学と民俗学 —

先にわれわれが確認した歴史観、すなわちより新しい時代を喪失の相のもとで眺める歴史観は、すでにドイツの人文科学の一部門のなかに確たる場所を占めていた。歴史家フランティšek・グラウスは、タキトゥスの『ゲルマーニア』が発見され、ドイツに受容されて以降、すなわち16世紀の人文主義の時代に起った歴史叙述の一大変化のなかにこの歴史観の先駆者を見る¹³⁾。中世の歴史叙述を特徴づけていたモチーフは帝国移管説 *translatio imperii* であった。この説によれば、地上における神の国である帝国 *imperium* はそのおりおりの統治者を変えることはあっても、帝国自体の性格には微塵の変化もなく、神による最後の救済を待つというのである。そして、ドイツ人はこの帝国をフランク人を介してローマ人から受け継いだと理解される。したがって、ドイツ人が現在継承しているのはローマ帝国の遺産であると考えられた。そして、これがローマ教皇庁のドイツにたいする収奪を正当化する根拠ともなっていたのである。しかし、あらたに発見された『ゲルマーニア』では、ゲルマン人はローマ帝国と対等に張りあう勢力として描かれている。ドイツの人文主義者が自らの祖先と考えたゲルマン人は、もはやローマ帝国の単なる後継者ではなく、ローマ帝国と同格の存在であったことになる。タキトゥスの数えあげる祖先の美德は、キリスト教化によっても滅びることはなく、現在のドイツ人のなかにもしっかりと生きつづけており、それはいつの日かかならず再生すると考えられた¹⁴⁾。そこには、極度に理想化された古き良き時代が、解体の時代をこえ、ふたたび再生するというモチーフがある。グラウスは、この歴史叙述の一大変化によって、その後のドイツの歴

史研究が「起源」Ursprung への問い、「連続性」Kontinuität の探究によって強く刻印されたことを指摘するとともに、この歴史観が19世紀以降の専門科学のなかで主として独文学によって継承されたことをもあわせて示唆している¹⁵⁾。

1800年前後のドイツの知識人サークルを支配していた重大な関心は分裂と統一をめぐる問題であった。しかし、統一をめぐる議論はけっして一方向にあったわけではなく、そこには二種類の異なる方向が識別される。ひとつは、領邦の分裂をおもく見て、国家の統一を最優先課題と考える立場である。人文科学の世界でとりわけこの立場を代表したのは歴史学科であった。レオポルト・フォン・ランケの弟子ゲオルク・ヴァイツ、ハインリヒ・フォン・ジーベルらによって、ドイツの歴史学は国家史、政治史に強く方向づけられた。中世史研究の領域では、それはとりわけ国制史 Verfassungsgeschichte の占める比重の大きさに現れた。そのさい、研究の問題関心は、中世国家を近代国家の先駆的形態として位置づけること、すなわち国家の実存を証明することに置かれていた¹⁶⁾。このような関心から、たとえば中世のフランク帝国は「未熟ながら官僚制的・集権的な統治体制をとる君主制国家」というイメージで描かれたし、ドイツ国家の起源をめぐる論争がくり返されもした¹⁷⁾。このような古典学説的な国制史にたいしては、すでにオットー・ブルンナーがその概念や問題設定の「時代被拘束性」Zeitgebundenheit を鋭く指摘しているのであるが¹⁸⁾、これは見方を変えるならば、中世史研究も強く近代を志向していたということになる。すなわち、ドイツの歴史家に共有されていた歴史観は、中世史家の場合でも歴史の流れをおおむね国家統一へと向かう進歩の過程と把握する立場であったと言てよい。

分裂と統一をめぐるいまひとつの議論は教養の分裂を重視する立場である。人文科学の世界でとりわけこの立場を代表したのは独文科であった。ここでは、ヤコブ、ヴィルヘルムのグリム兄弟の影響がことのほか強く、この学科と1920年代以降哲学部内でそこから徐々に自立する民俗学科ののちの発展を大きく規定したと言っても過言ではない。この学科を特徴づける歴史観の基本的な性格は以下の三点に要約できよう。

- (1) 有機的な統一とされる民族の理想化された状況が古ゲルマン時代に存在したと想定する点。しかも、その統一のなかでは治者と被治者が同一の美德によって結ばれていたとされる。しかし、のちに外来の文化遺産を受容した支配層、上流階層は徐々にこの統一から離脱していく¹⁹⁾。外来の文化遺産としてなにを考えるかは論者によってまちまちであるが、さしずめキリスト教化、ローマ法の継受、フランス風の宮廷趣味、場合によってはラテン語の導入、さらにのちには産業化などがそれと見なされた。
- (2) この歴史観の本質は、一般には進歩と考えられる過程を理想化された古き習俗の解体の歴史とみなす点にある。しかし、将来はいまより悪くなることはない。ヤコブ・グリムは言う。「われわれはまだ中間にいる。あきらかに起源よりは悪く、望むらくは将来よりも悪い中間に

いる。』²⁰⁾この学科では将来の「再生」Wiedergeburt／Belebungにたいする期待が顕著であった。

(3) 「再生」の根拠は、外来の文化遺産の受容によって教養と生活が乖離していくという趨勢のなかで、古い良俗が完全に滅んでしまうまえにかれらがそれに気づいたという点に求められる。したがって、研究の主眼はまだ「すたれていない」unverdorbenと考えられたものを「救い、集める」retten und sammeln ことに注がれた²¹⁾。

この学科の機関誌となるべく期待され、19世紀の中葉に創刊された『ドイツ古代学雑誌』は、その編集指針のなかで雑誌の目的をつぎのように述べる。

慣習、法、信仰といった古事のなかに集め、探求し、解釈しなければならないものがどれだけ残されているかはだれの目にもあきらかである。かくして、学問 wissenschaft にとって、さしあたり昨今の教養 bildung の変化のなかでますますすたれてゆく古い時代の痕跡を救うことが重要である²²⁾。

ここでも、「教養の変化」が強く意識されていたことがわかる。それとともに、この学科でも、「救い、集める」ということに、言いかえるならば「それがほんらいどうあったのか」という事実確定に重きが置かれたのである。ただし、「救い、集める」対象は、歴史学ではその視線が国家や政治に方向づけられていたのとは異なり、独文学や民俗学では民族に方向が定められていた。そして、独文学の歴史観は、歴史学の場合とは逆で、歴史の流れをおおむね喪失の相のもとで把握する立場にあったと言ってよからう。

この特異な歴史観はドイツの独文学・民俗学研究の重点領域に大きな偏りをももたらしている。『ドイツ古代学雑誌』はその名称に忠実で、現在に至るまで古い時代を扱う論説によって占められている。この雑誌の公刊がいぜんとして軌道に乗らない時期に、それを助ける目的で『ドイツ文学雑誌』の刊行が始まる。この雑誌は先行の『ドイツ古代学雑誌』にたいする配慮から、近代文学の領域を重視することを予定していた。しかし、この雑誌上で近代文学にかんする研究の比率が中世文学のそれとほぼ同等に達するのは20世紀も半ばのことであった。中世研究の優位は19世紀、さらに20世紀初頭の独文学講座の配分にも明確に現れていた²³⁾。まだ「すたれていない」ものはより古い時代にあると考えられ、時代が古ければ古いほどより尊重されるという風潮を生んだ。ボルフガンク・エマーリヒは、すでにヤコブ・グリムのなかに「古いもの、始源的なものはなにもかもが貴重で、新しいものはなにもかもが退化・解体・喪失・墮落を意味する」という傾向が存在することを確認している²⁴⁾。

民俗学の領域でも研究対象の偏りは否定しがたい。ヤコブ・グリムは古俗収集者のためにかれ自身が作成したマニュアルのなかでつぎのように述べている。

たかい山岳に、閉ざされた谷に、すたれていない感性がもっとも純粋なかたちでまだ生きている。そこに通じる道もなく、似非啓蒙が入り込んだり、その著作が伝わる街路もないせまい村々。そこにはまだ祖国の慣習、伝説、信心深さといった財宝が人目にふれずに眠っている²⁵⁾。

ここには文明批判的なニュアンスが濃厚である。それと同時に、収集の領域がなかば無意識のうちに設定されていることに気がつく。民衆世界、それも都市ではなく、田園地帯である。ドイツの民俗学は圧倒的に農村民俗学に傾斜していた。ドイツにおける都市民俗学の立ち遅れが認識され、民俗学会のなかに都市民俗学会が意識的に設けられるのは、まだそれほど古いことではないのである。ふたつの研究領域をつなぐのはすでに触れたあの特異な歴史観であった。古き良き時代には民族全体が共有していた美徳の数々が、いまでは文明に汚染されていない僻地の民衆のなかにしか存在しないと考えられたのである。のちに学術のみならず、文芸の世界でも顕著になる民族と農民の同一視は、すでにこの歴史観のうちに内包されていた。

この歴史観が蔓延する理由は、これまでの研究では特定の局面状況に求められていた。たとえば、啓蒙主義の急激な普及にたいする反動としてのロマン主義の勃興、ヴィルヘルム帝政下の急速な産業化やヴァイマル時代の退廃的な文化運動にたいする反動としての文化ベシミスムスの台頭といった具合である。しかし、独文学や民俗学の世界では、時代を越えてこの歴史観が驚くべき安定性をもって維持されていることを指摘しておきたい。筆者は、独文学や民俗学の世界ではこの歴史観が1960年代まではほぼ無批判に継承されていたと考える。この安定的持続を可能にしたものはなにか。ひとつの、しかし決して小さくはない可能性として、学派の問題を挙げなければなるまい。事実、学派の形成が学科の自然な発展を阻害していることを指弾する声はすでに19世紀の中葉から後を絶たないのである。一例を挙げるならば、1856年に公刊された『ゲルマニア ドイツ古代学四季報』の「案内」は学派の弊害をすでにつきのよう

に指摘していた。

ドイツ文学の領域では、他の学術分野にないほど権威の支配、学派 Schule の名望が最高潮に達し、それはもはや建設的ではなく、抑制的に働き、自由な研究や真理の遠慮ない告白とは両立しえないほどになってしまった²⁶⁾。

しかし、独文科や民俗学科における学派形成を扱った研究はまだなく、いまはこれ以上この問題に触れることはできない。ここでは独文学や民俗学においてはすでに触れた歴史観が安定的に保存されたということを確認するにとどめたい。むろん、時代がたつにつれて独文学や民

俗学の研究も押し止めがたい専門分化の傾向にさらされ、このような大きな歴史観を掲げるものはすくなくなるのであるが、それでもこの歴史観は生きつづけた²⁷⁾。

ヴィルヘルム・グリムは、『子どもと家庭のための童話』（いわゆる『グリム童話集』）の「第二版への序文」のなかで、「農村はまだ先祖伝来の習俗や歌謡の宝庫である」と述べる。そして、自らの収集した伝承を北欧の伝説と実例を挙げて比較しながら、両者のモチーフが極めてよく似ていることに注意を促す。当時ドイツの文化遺産と考えられていた北欧の伝説を介することによって、かれは「これらの民衆伝承のなかに、失われたと考えられていた原ドイツの神話urdeutscher Mythos がたからかに鳴り響いている」ことを強調する。ここにも特異な歴史観、そこから発する問題設定が生きている。また、かれはつぎのように語っている。

伝承の歪曲されやすい性格、保存のいい加減さ、それゆえに長期の存続が不可能だと考える人は、どれほど正確にそれがつねに同じ内容のもとにあるのかを聞かなければなるまい²⁸⁾。

それでは、古い時代との連続性を保証していたものはいったいなにと考えられていたのか。ヴィルヘルムはそれについて明示的に語ることはないが、それはしばしば独文学や民俗学の世界では有機的 *organisch* な要素に還元された。

ドイツにおける有機的な思考の濃密さは、すでにスカンジナビア学者クラウス・フォン・ゼーの指摘するところである。フォン・ゼーは、その著作『1789年の理念と1914年の理念 フランス革命と第一次大戦のあいだのドイツの種族思想』のなかで、「種族的・有機主義的な理念の継続的な利用、そのひろい普及はドイツ固有の現象である」と主張する。フォン・ゼーにとって、「1789年の理念」とは「自由・平等・友愛、すなわち普遍的な人権の理念、西ヨーロッパ民主主義の理念」を指す。いっぽう、「1914年の理念」は「民族共同体、すなわち有機的に成長し、かつまた自己充足的な民族体」のあらわれであるという。フォン・ゼーは、ドイツの思想界で「1789年の理念」が「1914年の理念」に席を譲る過程を、重要な人物—フィヒテ、アルント、ヤーン、ミュラー、ニーブール、ダールマン、ヴィーンバーク、ゲルヴィーヌス、フライターク、リール—を尾根づたいに進むというドイツの学問史の伝統的なスタイルで描く²⁹⁾。この手法で「種族的・有機主義的な理念のひろい普及」をどこまで主張できるのかには疑問がのこる。また、「1789年の理念」と「1914年の理念」という対立図式はすこし問題を単純化しすぎているようにも思える。それでも、ドイツの思想界に見られる有機的な思考の根強さにかんするかれの指摘は興味深い。そして、この有機的な思考がもっとも有利な繁殖の土壌を見いだしたのが、すでに触れた歴史の流れを喪失の相のもとで把握する歴史観においてであった³⁰⁾。

歴史の流れを喪失の相のもとで眺める立場にとって画期的な著作が世紀転換期に出版される。

1887年のフェルディナント・テンニエスの著書、1912年の第二版からは『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』というタイトルを与えられた書物である³¹⁾。テンニエスはまずゲマインシャフトとゲゼルシャフトという用語で人間関係形成のふたつの類型を識別する。ゲマインシャフトは自然な、始源的な、家族的な人間関係であり、いっぽうゲゼルシャフトは人工的、人為的な性格をもつ。なぜなら、ゲゼルシャフトは目的のある行為、利害と合理性の帰結、個人の単なる契約行為の産物だからである。目的合理的な行為、合理的な契約関係の結果としてのゲゼルシャフトはそれゆえ「機械的」mechanischであり、いっぽうゲマインシャフトは「有機的」organischな人間関係である。この対立図式が包括的な歴史理解と結合するとき、ゲマインシャフトの時代は「一致、倫理、宗教といった社会意志」によって特徴づけられることになり、ゲゼルシャフトの時代は「協定、政策、世論といった社会意志」によって特徴づけられることになる。ゲゼルシャフトの時代の特徴は、「合理主義」、生産ばかりでなく「世界」の「合理的機械化」にある。これに中世の「有機的な秩序」が対峙される。テンニエスによれば、ゲマインシャフトは社会関係のより古いばかりか、よりすぐれた類型であり、結局ゲゼルシャフトは「あらゆるゲマインシャフトの解体のプロセス」を示すにすぎないとされる。ゲマインシャフトとゲゼルシャフトの対立というテンニエスの公理は急速に通俗化された。そのさい、内容よりもむしろ「有機的な秩序」としてのゲマインシャフトと「機械的な秩序」としてのゲゼルシャフトの対立図式が受容される傾向があった。ゲマインシャフト概念はドイツでは、とりわけ第一次大戦以降は文化的・社会的再生のためのキーワードになった。このゲマインシャフト概念がもっとも反響を見いだしたのも独文学や民俗学の世界であった³²⁾。

さて、ここでもういちど独文学や民俗学の世界にひろく見られた歴史観の特徴をまとめておきたい。この歴史観の特徴は歴史の流れを古き良き習俗の喪失・解体と把握する点にある。そして、まだ「すたれていない」習俗を「救い、集める」ことに研究の意義が認められた。また、このような連続性を保証している要因はしばしば有機的な要素と理解されていた。したがって、独文学や民俗学の分野では「有機的」と考えられたものの痕跡が「救い、集め」られていたわけである。しかし、時間を越えて存続する有機的な要素は結局歴史研究の対象とはなりえない。その意味でこの歴史観は歴史のない歴史観であったと言えるかもしれない。もしかすると、この歴史なき歴史観は「救い、集める」という手段によってかろうじて人文科学の領域にとどまっていたのかもしれない。では、なんらかの不可抗力が働いて「救い、集める」ことを放棄してしまったとき、これらの研究領域はどこへ行くのか。そのときは「有機的」と考えられたものは分析の対象ではなく、分析の前提となっていた。人文科学の生物学にたいする期待のたかまり、また生物学の人文科学の協力にたいする期待の背景がここにある。世紀転換期のころからドイツの思想界において強く意識されはじめたのは、この「救い、集める」ことの効用の限界であった。

すでに、ニーチェはその『反時代的考察（二）』（1874）において「時代が正当にも誇りとしているもの、つまり歴史的教養を、ここでいちど時代の害毒、虚弱、欠陥として理解する」ことに挑んでいた。ニーチェによれば、歴史研究は生の領域を限りなく断片化するばかりで、それらを統一する力はないとされる³³⁾。ニーチェの問題を継承したディルタイは、その『精神科学序説』（1883）のなかで歴史認識がもたらす相対主義の危機と取りくんでいた³⁴⁾。歴史学の認識手段が肥大化することによって生じた専門科学の個別化、細分化。細分化する専門科学はわれわれの生になにか意味のあるものを示すことができるのであろうか。科学の生からの乖離、科学的認識の細分化がもたらす相対主義の危機といった問題が、世紀転換期のドイツの思想・学術世界を賑わせていた。そして、これらの問題群はしばしば歴史主義という専門用語で呼ばれることもあった。この歴史主義の克服、全体性の回復という問題が20・30年代のドイツの思想・学術世界を支配する一大関心事であったと言っても過言ではない。独文学の領域でもドイツ学運動がこれらの問題群と取りくんでいた。

ドイツにおける独文学研究の増進、学校教育のなかのドイツ語授業の向上をはかるために、ドイツ独文学者連盟が結成されたのは1912年のことであった。この連盟の発足にあたっては三名の人物がイニシャティヴをとっている。フランクフルトの女子中等学校校長クラウディウス・ボユング、フランクフルトの高等専門学校教授フリードリヒ・パンツァー、ギムナジウム教員ヨハン・ゲオルク・シュブレンゲルの三名である。しかし、ドイツ独文学者連盟は専門研究者以外の人たちだけで構成されていたわけではない。1912年5月フランクフルトで開催された創立集会の呼びかけには、すくなくとも専門研究者も名を連ねていた。ここに中等学校のドイツ語教師と大学の独文学者の親密な協力関係を読み取ることができる。ふたつの集団を結集するひとつの連盟が計画され、実現を見たのである³⁵⁾。

ドイツ学運動とは、主としてこのドイツ独文学者連盟を舞台として20・30年代に展開された教育改革運動である。この運動の主旨を一口にまとめるならば、そこでは学校教育の意味が問題になっていた。学術活動の高度な専門分化にともない、学校授業もその領域の細分化が決定的となった。学校教育は専門研究の成果を踏まえて行われなければならない。しかし、研究の専門性がたかまればたかまるほど、それを学ぶことの意味を生徒に伝えることはむずかしくなる。ここに教員たちの抱えるディレンマがあった。つまり、学校は「知識のための知識」を伝達するだけの場でよいのかという疑問である。とくにドイツ語教師の場合は、他教科の教員と比較にならないほど専門研究者との交流が密であったために、いっそうこのディレンマは大きなものとならざるをえなかった。ドイツ学運動は、ドイツ語授業を基軸に据え、細分化した関連教科を統合することによって学校教育に意味を与えることを目標に掲げていた。そのさい、教育の伝えるべき価値として選ばれたのが民族理念であった。この運動を主導したのはドイツ語教師たちであったが、そこには専門研究者もすくなくとも関与していた。このような文脈

で、それまでドイツ語教師向けの雑誌であった『ドイツ語教育雑誌』 Zeitschrift für deutschen Unterricht は、専門色を払拭するという意図から1920年より『ドイツ学雑誌』 Zeitschrift für Deutschkunde と名称を変更しているし、やはり同じ意図のもとでドイツ独文学者連盟は1920年にドイツ的教養協会 Gesellschaft für deutsche Bildung と改称している。学術研究の専門分化、それにともなう学問と教育の生の領域からの退却、意味喪失といった問題を克服し、民族理念のもとで全体性の回復をはかろうというのがドイツ学運動の主旨であった。そのさい、当時の学術活動が陥っていたディレンマをかれらはしばしば歴史主義という用語で呼んでいる。

歴史主義という概念にかんしては、わが国の歴史学界には一定の理解が成り立っているように思われる。そこでは、一口にまとめるならば、歴史主義とはドイツの伝統的な歴史叙述に見られる特殊な癖と理解されている。しかし、20・30年代のドイツで活発に議論されていた歴史主義論では、若干ニュアンスの異なる問題領域が扱われていた。すでに前世紀の80年代には、この用語は学術世界でしばしば非難の意味をこめて使われていたのが確認できる。法学や国民経済学などの分野における歴史学派の興隆をネガティブに捉える人たちは、歴史研究が現象を部分に解体するばかりで、その全体を示す能力を欠くことを批判していたのである³⁶⁾。すでにニーチェやディルタイが捉えた歴史認識の分解作用が、いまや歴史主義という用語で呼ばれることになったわけである。20・30年代の学術・文芸の世界で歴史主義の危機、歴史主義の克服といったことが問題とされる場合、まぎれもなくこのニーチェやディルタイが捉えた問題が扱われていた³⁷⁾。つまり、ヤコブ・グリムをはじめとする独文学者が提唱していた「救い、集める」ことの価値が疑問視され、その効用の限界が強く意識されはじめたのである。もういちどくり返そう。独文学や民俗学の研究は過去からの連続の痕跡を「救い、集める」ことに腐心し、このような連続性を保証している要素としてしばしば有機的なものの介在を想定しがちであった。しかし、これらの研究が「救い、集める」ことを放棄してしまったとき、有機的なものは分析の対象ではなく、分析の前提になっていた。つまり、ここで扱った人文科学の一分野は、その内部から確実に生物学化していたのである。ドイツ学運動の立役者のひとりシュプレングエルが、1933年に「郷土の基盤、生存圏、血の遺産、人種といった問題にかんして」生物学への架橋を要求したとき、かれはもはやなんら意義申し立てを恐れる必要はなかったのである³⁸⁾。むろん、すべての研究者が「救い、集める」ことを放棄してしまったわけではない。また、生物学至上主義を受容したのは学科の伝統とは比較的縁の薄い少数の新参者であったという異議も理解しうる。しかし、ここで問題にしているのは個々人の動向ではなく、人文科学の一分野に特徴的に見られた歴史観の末路なのである。われわれはこの歴史観のなかに生物学至上主義につながりうる要素が存在したことを確認できた。生物学至上主義の時代はけっして新しいこととはじまりを意味しない。それは確実にひとつの歴史観の終焉であった。「救い、集める」

という点においてこの歴史観も歴史主義と呼ばれる文化的・社会的運動の一構成部分をなしていた。しかし、「救い、集める」という認識方法を放棄してしまったときに、この歴史観は生物学至上主義へ転じていた。つまり、この人文科学の一分野に芽生えた生物学至上主義は、歴史主義のなかから、歴史主義のもっている固有の価値を拒絶することによって生まれたのである。人文科学の生物学にたいする協力とは、人文科学が自らの固有の価値を否定したうえに成り立つ、考えられるかぎりもっともみじめな協力であった。

IV マックス・ヴェーバー ―文化科学の生物学化にたいする警告―

文化科学者の生物学にたいする期待のたかまりをたえず危惧の念をもって眺めるものもあった。文化科学の生物学化にとりわけ強く警告を発しつづけたのは社会学者マックス・ヴェーバーであった。ヴェーバーの著述、学会活動を辿ることによって、われわれは社会科学の分野においても生物学至上主義の足音がたかまってくるのを聞きわけることができるとともに、それと批判的に対峙する文化科学者の姿勢をも考えることができる。ヴェーバーは比較的早い時期から社会学や歴史学の課題に安易に生物学の認識方法を応用することには警戒の念を怠ってはいなかった。ヴェーバーは、国民経済学の歴史学派の代表的存在であるヴィルヘルム・ロッシェの歴史的方法を批判的に検討したさい、「極めて多くの近代の「社会学者」「Soziologen」においてそうであるように、ロッシェの歴史的方法のなかに「有機的な」「organisch」社会理論がやむなく生物学的な類推とともに」混入していることに注意を促し、この生物学的な類推を指弾する。

ロッシェはそれゆえ、「民族」「Volk」という概念についてそれ以上説明することなしに「諸民族」「Völker」の有する具象的な多様性を扱うことができると考えるのであるが、それは、生物学者たちがたとえばある特定の型の「象」の具象的な多様性についてそうできるのと同じである、という考えなのである。

ロッシェが「民族」なるものを「有機的な」自明の存在と前提していることに批判がなされている。ヴェーバーにとって、文化科学と生物学の認識方法の根本的な相違はひとつの重大な問題領域として認識されていた。そのことは、ヴェーバーの科学論のなかでこの問題にすくなくならぬスペースが割かれていることからわかる。ヴェーバーは、この文脈で歴史家カール・ランプレヒトの認識方法をも問題とする。

昨今、歴史家のあいだではとりわけランプレヒトがこのような生物学的な類推および概念

を用いて研究している。ここでも国民は、一ランプレヒトがはっきり言っているように――「生物学的な性格」を備えた発展、すなわち「定型的な」、「正規の」発展諸段階を特定の法則にしたがって経過する発展を自ら体験するような、ひとつの「社会心理的」統一体として実体化される³⁹⁾。

ヴェーバーは、生物学の認識方法が文化科学の問題設定を無に帰すであろうことを正確に見抜いていた。そして、たしかにヴェーバーは時流となりつつあった生物学的な認識方法とは一線を画していた。しかし、ヴェーバーにとって、文化科学のなかの生物学的な思考自体はまだこの時点では研究すべき問題として対象化されていたわけではなかった。つまり、初期のヴェーバーは文化科学の生物学化にたいする批判者ではあったものの、こういう言い方が許されるならば、いぜんとして消極的な批判者の域を越えることはなかったのである。

文化科学の生物学化にたいする積極的な批判者にヴェーバーが転じるのは、1910年のフランクフルトの社会学会であったと思われる。ここでは、アルフレート・プレッツの講演「人種および社会という概念とそれにかかわる若干の諸問題」と、それにたいするヴェーバーの反論が問題となる。この講演のなかでプレッツは「人種の生物学にたいする社会学の関係」を定義し、それに人種衛生学的な目標設定から彩色を施す。プレッツによれば、個体は「より上位の生の営みのなかに埋没するのみであり、そのなかで個体はごくささいな、つかのまの一部分であるにすぎない。より上位の生は変わることのない力や永続性という点でこの部分をはるかに凌駕する存在である。」この「永遠の生」「Dauerleben」を担う集合的な統一体が、まさしく生物学的に再生産・練成が可能な共通の遺伝情報の集積である「生氣的人種」「Vitalrasse」、すなわち「永遠の生の統一体としての生氣的人種」であるとされる。「人種」「Rasse」を永遠の生を備えた超個人的な統一体とするかくのごとき定義から、プレッツはあらゆる人文科学やあらゆる道徳にたいする人種生物学の支配の正当性を導きだす⁴⁰⁾。これにたいしてヴェーバーは価値自由という観点からプレッツの議論を論駁しようとする。ヴェーバーは、「社会状態に花が咲くのは人種に花の咲くことによる」というプレッツの表現を捉え、「人種に花が咲く」とはけっして科学的な表現とは言えず、「神秘的な種類の」表現でしかないと切りかえす。さらに、ヴェーバーの批判はつづく。

われわれは「生氣的人種」の概念とともに主観的な評価の漠たる領域に踏みこんでしまうことにはしませんか。この領域にプレッツ博士は踏みこんでおられるようにわたしには見える。博士が人種と社会の関係を確定なさろうとするそのいたるところで、博士はこの領域に足を踏みいれておられるようにわたしには見える。

ここにも、文化科学の課題から生物学の認識手段を厳格に排除してきたヴェーバーの基本姿勢を認めることができよう⁴¹⁾。

認識対象がなんらかの一般法則であるか、個体であるかは別として、認識の万能を信ずるところに近代の諸科学は成立を見た。これにたいして、ヴェーバーは認識の万能という前提には立たない。かれにあっては、対象が認識を決定するのではなく、認識が対象を決定すると理解されていた。つまり、現象世界には認識された対象しか存在しないのである。だからといってヴェーバーは認識の恣意性を肯定しているわけではないし、認識の不完全性から諦念に陥るわけでもない。認識はいかなる場合にも経験的な素材に基礎づけられていなければならないとされる。しかし、われわれの経験世界は無限の奥行きをもち、いっぽうそれを対象とするわれわれ人間は有限の存在でしかない。したがって、どんなに周到に組み立てられた認識といえども完全ということとはできない。ヴェーバーにとって、認識の万能を信ずるとは、このギャップを越えうる、すなわち有限をもって無限を越えうると考えることに等しい。それはもはや科学ではなく、ひとつの信仰となる。したがって、ヴェーバーはいついかなる場合にも科学的認識の限界を見極めることから出発する。ここに、ヴェーバーの科学論の特徴がある。ヴェーバーの目にはプレッツの立論は科学的認識の限界を逸脱したものと映った。ローマ帝国の衰亡を「民族生物学的」な見地から説明しようとする試みを捉え、ヴェーバーは指摘する。

古代的趣味と古代的教養層の消滅、ローマの軍隊の古い伝統の消滅、古い行政事務の消滅、こうしたことは、右の事情によって、また経済に由来する行政上の変化によって十分説明できることであって、なんらかの人種理論で補いをつけるなどすこしも必要ではありません。いま「必要」という言い方をしましたが、それは、今日ではもう認められないくらいではあっても、ともかくそういった要因がたぶん一役買っていたことを認めるのに、わたしもやぶさかではないからです。しかしそれはいま知りようもないことですし、そのことは今後とも変りないでしょう。とすれば、周知のそして十分の根拠があるのに、その根拠をさしおいて、今日また将来も検証不可能な仮説に寄りかかるなどは、科学の方法に抵触するというものです⁴²⁾。

ここでもヴェーバーは、科学的な根拠が薄弱であるという理由で、生物学的な認識手段を文化科学に適用することに警告を発しているのである。そして、プレッツにたいする反論をつぎのように結ぶ。

個別科学は、それぞれに特殊なこと、まさしくその科学にしかやれないことをやるのでなければ、個別科学はみなその目的を達することはない、わたくしはそう信ずるものです。社

会現象の生物学的考察がそうならないよう、お願いしたいものです⁴³⁾。

ヴェーバーの杞憂は「生物学至上主義に基礎を置く国家」のなかで現実のものとなった。この国家のなかで展開されものこそ、まさしく有機主義・生物学至上主義による実証主義・客観主義の克服のための闘いであった。むろん、ヴェーバーは有機主義・生物学至上主義を拒絶するのと同様に、実証主義・客観主義をも科学的な認識とは認めないのであるが、1910年の社会学学会におけるプレッツとヴェーバーの論戦は、来るべき生物学至上主義の時代の前哨戦であったと言ってよかろう。ヴェーバーは、科学の実証性・客観性という問題にかけて、プレッツの人種生物学的な立論を批判した。しかし、実証性・客観性という観点に立つかぎり、有機主義や生物学至上主義にたいする有効な批判は生まれてこない。なぜなら、実証主義や客観主義は事実が存在したことを確定するために編み出されたものであり、事実が存在しなかったという命題を証明するには不向きなのである。ヴェーバーが、すでに見たごとく、ローマ帝国の滅亡にかんするプレッツの「民族生物学的な」説明を、「必要」といういささか苦しい言い回しでかわさなければならなかったことにそれは如実に現れている。そもそも実証主義的な科学は、事実が存在したことを立証するために創られたものであり、事実が存在しなかったという命題を証明することはできないのである。それでは、事実がなかったとすれば、いったいなにがあったのであろうか。

プレッツの応戦によって、論戦のボルテージはさらに上がる。「(一般的な民族感情や白色人種という一貫した意識)は自然の産物 *Naturprodukt*, すなわち自然現象 *Naturerscheinung* として観察されるべきだ。」これにたいして、ヴェーバーはつぎのように答えた。

よろしい。しかし、事実や経験の産物としてではなく、大衆信仰 *Massenglauben* の産物として⁴⁴⁾。

ヴェーバーは有名な『職業としての学問』のなかで学問にとって必要なものは「靈感」であり、その「靈感」を司っているのは「僥倖」であるという。プレッツとの論戦のなかで「僥倖」がヴェーバーに微笑んだ。ヴェーバーはすでにそれ以前から生物学の認識方法が文化科学の問題設定を無に帰すであろうことを見抜き、それをかれ自身の歴史的・社会学的な考察から厳格に排除する態度をとっていた。しかし、プレッツとの論争はヴェーバーに生物学至上主義の蔓延を無視しているだけでは十分ではなく、「大衆信仰」というかたちでそれを文化的・社会的現象として対象化すべきことを教えた。事実がなかったとすれば、いったいなにがあったのか。それは信仰である。

ヴェーバーにとって、観察対象の性格は、「現象そのものに「客観的に付着している」ので

はない。むしろ、対象の性格は「われわれの認識関心の方向によって創りだされている」のである⁴⁵⁾。このような視点に立つならば、対象の性格に表出しているのは「われわれの認識」そのものということになる。学問的な営みとは「われわれの認識」をたえず対象化し、刷新する行為ということになる。

人種を信仰の産物として見る上述の視点は、ヴェーバーの『経済と社会』のなかに確認される。それは昨今のネーション研究のなかでしばしば引用される「種族的な」集団にかんする定義のなかに現れる。

われわれは、つぎのような人間集団を、血のつながりが客観的に存在しているかどうかにはまったくかわりなく、「種族的な」集団と呼ぶことにしよう。すなわち外的な特徴、習俗または両者が似ているとか、植民の記憶があるとかいうことにもとづいて、共同態関係の拡大のしかたにとって重要となるしかたで、出自の共通性を主観的に信じている人間集団であって、しかもそれが氏族でない場合に⁴⁶⁾。

ここでは、「種族的な」集団を実体として把握しようとする視点ははじめから問題とはならず、それは主観的な信仰の産物として理解されている。この定義にしたがうならば、「種族的な」集団は観察対象のなかにあるのではなく、観察者の意識のなかに存在することになる。別の言い方をするならば、種族意識は古ゲルマンの森や辺鄙な農村にあるのではなく、学者の仕事場にあったことになる。観察者の意識を対象化することからは、学問史への視座がおのずと開けてこよう。しかし、この定義にもとづいてヴェーバー自身がかれの歴史的・社会学的な手法を用いて分析を試みることはなかった。ヴェーバーは1920年に没した。

V ヴェーバーの遺産

ヴェーバーもそこに属していたドイツの社会学においても、問題設定や命題の「生物学化」が顕著になる⁴⁷⁾。ヴェーバー以降の社会学の代表者たちに影響を及ぼしたのは、ヴェーバーの視点ではなく、プレッツの観点であった。1930年にベルリンで開催された第七回ドイツ社会学会は四つの部会から構成されていた。「政治社会学部会」はフランツ・オイレンブルクを議長として「ドイツの諸部族」というテーマを取りあげた⁴⁸⁾。この部会では生物学者 W. ヘルパッハ、文学者ヨゼフ・ナドラー、歴史家ヘルマン・オバーンが報告している。オイレンブルクは自問する。「なにが民族の相違を規定しているのか。それを決定するのは出自や血なのか。それとも環境や歴史なのか。」この問いにたいする解答は部会の目標設定にかんするオイレンブルクのコメントのなかにある。

われわれはこのメンバーのとりあわせによって部族 *Stammesart* にかんして社会学的に文学と歴史を人間学・生物学の基礎のうえに築くことを試みた。

三つの講演は「文学と歴史を人間学・生物学の基礎のうえに築く」という方針に強く刻印されている。そこには文化科学の認識方法を生物学のそれから厳格に区別しようとしたヴェーバーの姿勢は認められない。報告後の「討論」のなかにも、第一回ドイツ社会学会のヴェーバーに匹敵する批判者を見つけることはできない。

生物学の影響が確認できるのは学会活動の領域だけではない。ドイツ社会学会との親密な協力関係のもとで「ケルン社会科学研究所」*Das Forschungsinstitut für Sozialwissenschaft in Köln* が『ケルン社会学四季報』*Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie* の創刊を開始したのは1921年のことであった⁴⁹⁾。この機関誌もまた「生物学化」を免れなかった。この雑誌は第一巻（1932／33年）から新しい主題領域「生物社会学」*Zur Biosozilogie* を設ける。この巻には責任編集者レオポルト・フォン・ヴィーゼの手による「生物社会学」にかんする概要がある⁵⁰⁾。それによれば、社会学は将来の人間学 *Anthropologie* の三部門、すなわち人間にかんする学説の自然科学的、人文科学的、社会科学的な部門のひとつにすぎないとされる。そして、

社会科学的な人間学、まさしく社会学は、社会領域のなかで大きな意義を有するいくつかの形象を、自然科学的な人間学、すなわち人間にかんする生物学の認識を援用することなく十分説明することはできない。

社会学においてもすでにナチスの権力掌握以前に生物学にたいする期待のたかまりが確認できる。

われわれがここで取りくむ生物社会学で念頭に置いているのは、生物学そのものの一部分ではなく、あくまでも社会学の境界領域であり、そこで生物学的な要素が境界を越え、社会科学の問題と融合する境界領域にすぎない。

フォン・ヴィーゼがこの境界領域として列挙するのが、「人種、民族、部族、家族」である。ヴェーバーが固執しつづけた文化科学の認識方法と生物学のそれとの厳格な区別はここではまったく考慮されてはいない。生物学的な問題設定や命題は、1933年以前にすでに社会学の学会や機関誌のなかでかなりの勢力となっていたのである。ヴェーバーの示した信仰の産物としての

「種族的な」集団という見方、別の言い方をするならば「われわれの認識」を対象化するという観点が、まだこの時期にはドイツの人文・社会学者の念頭にはなかった。

「ケルン社会科学研究所」は1934年3月31日に閉鎖された。それとともに『ケルン社会学四季報』も公刊を打ち切られる⁵¹⁾。「生物社会学」の項目も、二年間にわたって四本の論説を掲載するにとどまった。最後の号には責任編集者であるフォン・ヴィーゼの廃刊の辞が「一二年後」というタイトルで掲載されている⁵²⁾。「いまやまさしくドイツにおいても、強い影響力を振るう現実に即した社会学説 *realistische Gesellschaftslehre* の時代が到来した。」この時代の要請に応えるために、フォン・ヴィーゼは政治倫理とともに「生物学、遺伝学説、人種学説」が不可欠なことを認めつつも、それだけではことを成就しえないとしたうえで、つぎのように述べる。

しかし、人間の共生・協調にかんする生活に即した学説 *eine lebensnahe Lehre* がもつ豊饒性、多彩な効用を証明することができるまさにこのときに、誤解とすれ違いがぬきさしならないほどに、いやそれどころか—わたしはこれを言うのをためらわない—悲しむべきほどに積もってしまった。

ここには突然の廃刊にたいする無念のおもいがつづられている。それとともに見逃せないのは「生活に即した学説」というフレーズである。「生活に即した学説」、「現実に即した学説」は、学者の現実逃避にたいする激越な批判とともに時代の合言葉であった。この点でも、ヴェーバーの視点がのちの社会学に受容されていないことが確認できる。いま、生と科学の関係にかんするヴェーバーの考察が問題となる。科学が科学としての純粋性を追求すればするほど、それは生とは無縁な存在になっていく。しかし、逆に科学には生にたいする指針を示したいという意欲もあり、またそれをある程度期待されてもいる。このディレンマのなかにこそ近代科学の実存があったと言っても過言ではない。生と科学の関係にかんする問題は、ニーチェによって提起され、ディルタイがそれを受け継ぎ、20・30年代には学術・教育世界の一大関心事となっていた。すなわち、生が科学に従属すべきなのか、科学が生に従属すべきなのかという問いである。19世紀前半を特徴づけた科学万能主義は前者の立場にあり、ニーチェやディルタイは後者の立場に属すると言ってよかろう。これにたいしてヴェーバーの立場は、科学と生の関係にかんする議論を支配・従属の関係から解放し、それぞれを自律的な価値をもつ領域として峻別する。すなわち、事実認識と価値判断の区別である。そのうえで、科学は生になにをなしうるのか、そしてなにをなすべきではないのか、つまり科学の限界と効用を考えるのがヴェーバーの科学論の特徴であった⁵³⁾。そして、ヴェーバーはドイツ社会学会の発足以来とくにこの「価値自由」の原則の確立に尽力していた⁵⁴⁾。科学を生に従属させる「生活に即した学説」という

立場は、あきらかにヴェーバーが欲していた方向とは異なる路線なのである。

さて、『ケルン社会学四季報』は新シリーズ『ケルン社会学雑誌』Kölner Zeitschrift für Soziologie として1948年に装いあらたに創刊された。創刊号の巻頭にはフォン・ヴィーゼの「重ねて一二年後」というタイトルの創刊の辞が掲載されている⁵⁵⁾。フォン・ヴィーゼはそのなかで第三帝国下のこの雑誌の中断を、「政治的な偏向の強制」が避けがたくなったためと説明する。しかし、その後につづく一文が目をはひく。

われわれは、中断せざるをえなかったところからくじけることなく活動を再開する。

このときにはまだ、「生物学化」したかつての自らの認識を対象化するだけの器量は、ドイツの社会学には備わっていなかった。ここには心性の断絶ではなく、むしろその連続が認められる。近年の学科史研究は、1945年以降の人文・社会科学がそれ以前との断絶よりも、連続の側面を強く示すことを強調する傾向にある⁵⁶⁾。つまり、社会学で確認した事実はその他の分野にも該当するのである。ドイツの人文・社会科学がヴェーバーの遺産を受容し、「われわれの認識」の対象化に踏み出すまでにさらに数年の歳月が流れた。

- 1) 引用は以下の文献による。Bäumer-Schleinkofer, Änne, *NS=Biologie und Schule*, 1992, S.31.
- 2) *Ebd.*, S. 40.
- 3) 第三帝国下の生物学, 生物学教育については前掲書以外では, Dies., *NS-Biologie*, 1990; Deichmann, Ute, *Biologen unter Hitler. Vertreibung, Karrieren, Forschung*, 1992 を参照。
- 4) 歴史学については, Heiber, Helmut, *Walter Frank und sein Reichsinstitut für Geschichte des Neuen Deutschlands*, 1966; Werner, Karl-Ferdinand, *Das NS-Geschichtsbild und die deutsche Geschichtswissenschaft*, 1967. 独文学については, von Wiese, Benno u. Henß, Rudolf (hg.), *Nationalismus in Germanistik und Dichtung. Dokumentation des Germanistentages in München vom 17. bis 22. Oktober 1966*, 1967. 民俗学については, Dow, James R. and Lixfeld, Hannjost (ed. and tr.), *The Nazification of an Academic Discipline. Folklore in the Third Reich*, 1994 をそれぞれ参照。
- 5) Werner, *a. a. O.*. 引用は S. 68.
- 6) Schönwälder, Karen, *Historiker und Politik. Geschichtswissenschaft im Nationalsozialismus*, 1992, S. 111-119.
- 7) 第三帝国下の民族史については, Oberkrome, Willi, *Volksgeschichte (Kritische Studien zur Geschichtswissenschaft 101)*, 1993.
- 8) Jansen, Christian, *Die Hochschule zwischen angefeindeter Demokratie und*

- nationalsozialistischer Politisierung. Neuere Publikationen zur Wissenschafts- und Universitätsgeschichte in Deutschland zwischen 1918 und 1945. In: *Neue Politische Literatur* Jg. XXXVIII, 1993, S. 213.
- 9) Conrady, Karl Otto, Deutsche Literaturwissenschaft und Drittes Reich. In: von Wiese, Benno (hg.), *a. a. O.*, S. 37-60.
- 10) デートレフ・ポイカート著 (雀部幸隆／小野清美訳)『ウェーバー 近代への診断』名大出版会, 1994年。引用はそれぞれ179, 182頁。
- 11) Krieck, Ernst, Germanische Grundzüge im deutschen Geschichtsbild. In: *HZ.* 159, 1939, S. 524-537. 引用は順に, S. 525, 526, 536, 535。
- 12) オットー・ヘフラーについては, Birkhan, Helmut, Vorwort des Herausgebers. In: Ders. (hg.), *Otto Höfler. Kleine Schriften*, 1992, S. IX-XVI; von See, Klaus, *Kontinuitätstheorie und Sakraltheorie in der Germanenforschung. Antwort an Otto Höfler*, 1972を参照。ここで取りあげる論説は, Höfler, Otto, Das Germanische Kontinuitätsproblem. In: *HZ.* 157, 1938, S. 1-26. 引用は順に, S. 2, 11, 25, 26。
- 13) Graus, František, Verfassungsgeschichte des Mittelalters. In: *HZ.* 243, 1986. S. 529-589, ここではとくに, S. 530-537を参照。
- 14) 管見の限りでは, 中世から近世にかけての歴史意識の変化を追跡した研究として, いまも以下の先駆的業績が価値を失っていないように思われる。Joachimsen, Paul, *Geschichtsauffassung und Geschichtschreibung in Deutschland unter dem Einfluß des Humanismus*, 1910. それ以外では, Paul, Ulrich, *Studien zur Geschichte des deutschen Nationalbewußtseins im Zeitalter des Humanismus und der Reformation.* (*Historische Studien*, H. 298), 1936; Grau, Anneliese, *Der Gedanke der Herkunft in der deutschen Geschichtschreibung des Mittelalters*, 1938; von See, Klaus, *Deutsche Germanen-Ideologie. Von Humanismus bis zur Gegenwart*, 1970; Krapf, Ludwig, *Germanenmythus und Reichsideologie. Frühhumanistische Rezeptionweisen der taciteischen Germania* 《, 1979.
- 15) Graus, a. a. O., S. 533 u. 572.
- 16) グラウスの前掲論文以外に, Böckenförde, Ernst-Wolfgang, *Die deutsche verfassungsgeschichtliche Forschung im 19. Jahrhundert. Zeitgebundene Fragestellungen und Leitbilder*, 1961.
- 17) 註16の文献以外に, 山田欣吾『教会から国家へー古相のヨーロッパー』創文社, 1992年, 31, 285-7頁。
- 18) Brunner, Otto, Moderner Verfassungsbegriff und mittelalterliche Verfassungsgeschichte. In: *Mitteilungen des Österreichischen Instituts für Geschichtsforschung* XIV, Erg.-Bd., 1939, S. 513-528. なお, オットー・ブルンナーの功績と問題点については, Oexle, Otto Gerhard, Sozialgeschichte—Begriffsgeschichte—Wissenschaftsgeschichte. Anmerkungen zum Werk Otto Brunners. In: *Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte* 7, 1984, S. 305-341. 邦語文献としては, 山田欣吾『国家そして社会—地域史への視点—』創文社, 1992年, 1-23頁。
- 19) このような歴史観の一例として, Grimm, Wilhelm, Kinder- und Hausmärchen. Vorrede zum zweiten Band (1815). In: Janota, Johannes (hg.), *Eine Wissenschaft etabliert sich. 1810-1870*, 1980, S. 80-83.

- 20) Steig, Reinhold, Jacob Grimms Plan zu einem Altdeutschen Sammler. In: *Zeitschrift des Vereins für Volkskunde* 12, 1902, S. 133.
- 21) Ebd., S. 133.
- 22) Haupt, Moriz, Vorwort zum ersten Hefte. In: *Zeitschrift für deutsches Altertum* 1, 1841, o. S.. なお、この序文はつぎの文献に収録されている。Janota, a. a. O., S. 212-216.
- 23) Zum 100. Jahrgang der Zeitschrift für deutsche Philologie. In: *ZfdPh.*, S. 1-3.
- 24) Emmerlich, Wolfgang, *Zur Kritik der Volksideologie*, 1971, S. 35.
- 25) Steig, a. a. O., S. 133.
- 26) Prospekt. In: *Germania. Vierteljahrsschrift für deutsche Altertumskunde* Jg. 1, 1856. なお、Janota, a. a. O., S. 320-323 に収録。引用は、S. 322.
- 27) 独文科の専門分化については、Janota, a. a. O., S. 7-10 u. 32-38.
- 28) Grimm, Wilhelm, *Kinder- und Hausmärchen*. Vorrede zum zweiten Band (1815). In: Janota, a. a. O., S. 80-83. 引用は順に S. 80, 82, 81.
- 29) von See, Klaus, *Die Ideen von 1789 und die Ideen von 1914*, 1972. 引用は、S. 7.
- 30) Conrady, a. a. O., S. 44-50. なお、独文学、民俗学のなかの有機的な思考については以下の文献をも参照。Röther, Klaus, *Die Germanistenverbände und ihre Tagungen. Ein Beitrag zur germanistischen Organisations- und Wissenschaftsgeschichte*, 1980; Frank, Horst Jochim, *Geschichte des Deutschunterrichts. Von den Anfängen bis 1945*, 1973; Emmerlich, Wolfgang, *Germanistische Volkstumsideologie. Genese und Kritik der Volksforschung im Dritten Reich*, 1968.
- 31) フェルディナント・テンニエス著（杉之原寿一訳）『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト 純粋社会学の基礎概念（上）（下）』岩波書店、1994年。なお、テンニエスの歴史観とその受容については、Oexle, Otto Gerhard, *Das entzweite Mittelalter*. In: Althoff, Gerd (hg.), *Die Deutschen und ihr Mittelalter*, 1992, S. 7-28. 引用は、S. 17f.
- 32) Conrady, a. a. O., S. 57f.
- 33) 「反時代的考察（二）生にたいする歴史の功罪」『ニーチェ全集 第二巻（第一期）』白水社、1980年、113-212頁。引用は、116頁。
- 34) ヴィルヘルム・ディルタイ著（山本英一／山田武訳）『精神科学序説 社会と歴史の研究にたいする一つの基礎づけの試み（上）（下）』以文社、1979年。
- 35) ドイツ独文学者連盟については、Frank, a. a. O., S. 527-533.
- 36) 国民経済学におけるカール・メンガーのグスタフ・シュモラーにたいする批判。法学におけるルドルフ・シュタムラーのエルンスト・イマヌエル・ベッカーにたいする批判。
- 37) 歴史主義概念の変遷については、Oexle, Otto Gerhard, >Historismus<. Überlegungen zur Geschichte des Phänomens und des Begriffs. In: *Braunschweigische Wissenschaftliche Gesellschaft, Jahrbuch 1986*, 1986, S. 119-155.; Wittkau, Annette, *Historismus. Zur Geschichte des Begriffs und des Problems*, 2. Aufl. 1994.
- 38) Sprengel, Johann Georg, Vorschläge für die Neugestaltung des deutschen Unterrichts an höheren Schulen im nationalen Staat. In: *Zeitschrift für Deutsche Bildung* 9, 1933, S. 575.
- 39) マックス・ウェーバー著（松井秀親訳）『ロッシャーとクニース』未来社、1988年。引用は、27頁と53頁。
- 40) Ploetz, Alfred, *Die Begriffe Rasse und Gesellschaft und einige damit zusammen-*

- hängende Probleme. In: *Verhandlungen des Ersten Deutschen Soziologentages v. 19-22. Oktober 1910 in Frankfurt*, 1911, S. 111-165. なお、ポイカート前掲書, 181-184頁を参照。
- 41) ポイカート前掲書, 184-188頁。さらに、中村貞二訳「ドイツ社会学会討論集」『ウェーバー社会科学論集』河出書房新社, 1982年, 250-259頁をも参照。
- 42) 前掲書, 252頁。
- 43) 前掲書, 259頁。
- 44) ポイカート前掲書, 191-2頁。
- 45) 出口勇蔵訳「社会科学および社会政策の認識の「客観性」」『ウェーバー 政治・社会論集』河出書房新社, 1988年, 49-115頁。引用は, 82頁。
- 46) Weber, Max, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 1965, S. 237.
- 47) 社会学の歴史については, Rammstedt, Otthein, *Deutsche Soziologie 1933-1945. Die Normalität einer Anpassung*, 1986. なお、邦語では、米沢和彦『ドイツ社会学史研究』恒星社厚生閣, 1991年。
- 48) *Verhandlungen des Siebenten Deutschen Soziologentage vom 19.-22. Oktober 1930 in Berlin*. Bd. 7, 1931, S. 233-267. 引用は, S. 234 u. 236。
- 49) この雑誌の社会学内で占める位置については、米沢前掲書, 148-150頁。
- 50) von Wiese, Leopold, Zur Biosozologie. Skizze eines Grundrisses der Biosozologie als der Lehre von den Generationsgebilden. In: *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie* 11, 1932/33, S. 366-381. 引用は, S. 366 u. 367。
- 51) 『ケルン社会学四季報』の打ち切りについては、その理由にかんして正確な情報は得られていない。この雑誌の後継雑誌として、ドイツ社会学協会の新しい会長ハンス・フライアーは、1934年からマックス・ヒルデベルト・ペーメやマックス・ルンプフとともに『民族鑑』“*Volksspiegel*”を編集している。Rammstedt, a. a. O., S. 16。
- 52) von Wiese, Leopold, Nach zwölf Jahren. In: *Kölner Vierteljahrshefte für Soziologie* 12, 1933/34. 引用は, S. 228。
- 53) 生と科学の関係にかんする議論を考察したものとして、Oexle, Otto Gerhard, Von Nietzsche zu Max Weber: Wertproblem und Objektivitätsforderung im Zeichen des Historismus. In: *Rechtsgeschichte und theoretische Dimension. Forschungsbeiträge eines rechtshistorischen Seminars in Stockholm im November 1986*, 1990, S. 96-121; Ders., >Wissenschaft<und>Leben<. Historische Reflexionen über Tragweite und Grenzen der modernen Wissenschaft. In: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht* Jg. 41, 1990, S. 145-161; Germer, Andrea, *Wissenschaft und Leben (Kritische Studien zur Geschichtswissenschaft 105)*, 1994。
- 54) 米沢前掲書, 82-93頁。
- 55) von Wiese, Leopold, Nach abermals zwölf Jahren. In: *Kölner Zeitschrift für Soziologie* 1, 1948/49, S. 1-4. 引用は, S. 1。なお、下記の文献がすでにフォン・ヴィーゼのこの論説に言及している。Rehberg, Karl-Siegbert, Auch keine Stunde Null. Westdeutsche Soziologie nach 1945. In: Pehle, Walter H. und Sillem, Peter (hg.), *Wissenschaft im geteilten Deutschland. Restauration oder Neubeginn nach 1945?*, 1992, S. 26-44. とりわけ, S. 34。
- 56) 1945年以降のドイツの諸学に見られる連続については、*Ebd.* の諸論説を参照。